

6-4					
主 題		ショートステイご利用者の認知症ケア実践における改善事例			
副 題		あきらめない根気強い介護ができた理由			
キーワード 1	認知症ケア	キーワード 2	ショートステイ	研究(実践)期間	7ヶ月
法人名		社福)一誠会	事業所名	第二偕楽園ホーム	
発表者(職種)		遠藤久美子(介護職員)、佐藤佑哉(介護職員)			
共同研究(実践)者		池野夏樹(介護職員)、植田マサ子(介護職員)、他			
電 話		042-691-2830	FAX	042-692-8288	
事業所紹介		八王子に 2018 年 9 月に地域包括ケアシステムの実現に向けて、地域密着型特別養護老人ホームをはじめ、看護小規模多機能型居宅介護、ショートステイ、サービス付き高齢者向け住宅、企業主導型保育所を備えた第二偕楽園ホームを開設。特養では一人一人の生き方を尊重したユニットケアに取り組んでいる。			

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

ご利用者 U 様(要介護 4・96 歳・女性)に関して、BPSD が顕著であり職員が対応に苦慮する事例があった。U 様は 2023 年から認知症対応型デイサービスを利用され、その後 2024 年 5 月から当施設のショートステイをご利用いただいた。ご利用前の情報としては『トイレの場所がわからないため誘導が必要』『午後～夜にかけて帰宅願望あり、自宅にいても同様であり、不穏になると耳も遠いせいか声掛けを聞いていただけない状況あり』といった内容であった。利用開始当初は、若干不安な様子はあるものの帰宅願望は顕著ではなく、その都度傾聴など会話での対応でご利用いただいていた。7 月のご利用時、利用中に他利用者と口論になり杖を振りかざそうとされていたため職員が介入し一旦落ち着くが、同日に同様の行為があり、その際に職員に対して頭突き、杖で叩くなどの行為が見られた。また帰宅願望も強くあり、「警察を呼んで!」「私はここを出る!」と大声で叫ばれる様子もあった。ご家族より、「デイサービスでの利用時も帰宅願望が強く、他利用者への影響もあるため利用時間を短縮できないか打診をされている」とのことでショートステイをいかに本人の負担なくご利用いただくか、また施設入所も検討されているとのことで、スムーズな入居につなげられるかが課題であった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

目的：ショートステイを本人、またご家族の負担なく継続しご利用いただくこと。また、ご家族の希望にもあるように施設入居を検討し、本人にご自身のペースで穏やかな生活をお送りいただくこと。

仮説：ご家族にもご協力いただき、職員とのコミュニケーションを密にすることでこれまでの背景や生活を介護職員が理解し、どのようなケアが必要なのか考えることでご利用者の QOL の向上、また職員の認知症対応スキルの向上ができるのではないかと考えた。

《3. 具体的な取り組みの内容》

少しずつショートステイの利用日数を増やしていった。7月の利用日数は11日間であったが、8月は16日間とし、ショートステイで過ごされる時間を増加させた。薬の調整もあり、7月に屯用で抗精神病薬が処方された。しかし薬の影響が強く出てしまい、首が前屈して歩行が難しい場合もあり、尿失禁や食事量低下などADLも低下してしまっていた。職員の関わり方として、可能な限り歩行を付き添う、本人が不安に感じないように傾聴する、施設内ではあるがユニットの外へ散歩に行く機会を創出するなど、基本的なケアを実施した。他職種にも協力を仰ぎご本人に時間をかけられるよう調整しながらケアを実施した。ご家族とも連絡を密にとりながら、ご自宅での様子を適宜伺い、気になることやご本人の状態、状況を共有した。

9月15日より利用できる範囲内でのロングショートでご利用いただき、これまで以上に本人と職員が関わる時間を増やし、施設での生活の中で不安なく過ごせるよう情報共有と基本的なケアを継続して実施した。

《4. 取り組みの結果》

ご本人の状態として、9月25日ころから屯用薬を服用せずとも夜間よく休まれるようになり、生活にメリハリが出るようになった。発語や笑顔も増え、首の前屈もほばない状態であり、失禁もない。食事でも半量召し上がる程度であったのが基本的に全量摂取されている。歩行状態も安定し、職員を気にかけてお手伝いをしていただくまでに回復した。結果として11月5日に施設入所することができた。

《5. 考察、まとめ》

基本的なケアを職員があきらめずに根気強く実施できたことが、認知症の症状改善にもつながったと考える。第二偕楽園ホームでは、現場職員が受け入れ当日の家族との時間調整、送迎ドライバーまた送迎担当者の調整、受け入れ時の体調や身体状況のチェック、細かい荷物の確認、ご自宅までのお送りまで実施している。そのためご家族との関係性も築きやすく、ご利用者の生活状況やショートステイご利用の背景などを実際に見て聞いて感じることができた。ご家族の想い、ご利用者の想いを間近で感じとることで、基本的な認知症ケアであっても『根気強いケア』、『あきらめない介護』が実施できたと考える。一方で認知症ケアに関し、根拠をもって実践する仕組みが希薄であるとも感じる。今後はより認知症ケアの知識を深めて科学的に認知症ケアを実践できる仕組みを整えていきたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

『認知症の介護のために知っておきたい大切なこと パーソンセンタードケア入門』

トム・キッドウッド&キャスリーン・ブレディン 著

《8. 提案と発信》

ニーズの多様化に伴い、介護現場もより多くの引き出しをもって業務にあたらなければならない。そのためにも認知症ケアに関するスキルの底上げと、専門的な業務以外のアウトソーシングやICTの活用といった生産性向上の活動が必須となる。ご利用者のQOLの向上とその人らしい生活が営めるよう支援していくために、介護職の専門性を高めていく必要があると考える。